



1980年(昭和55年)  
6月号(No. 420)  
社団法人 日本山岳会  
The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

昭和55年度日本山岳会通常総会…(1)  
 チョモランマ登山の成功への経過…(2)  
 「高峰への挑戦」を読んで(中島道郎)  
 小さいこと、大切なこと…(4)  
 東西南北…(4)  
 <ケダルナート通信>(婦人懇談会)…(5)  
 報告…(5)  
 上高地山研・開所式  
 (山研運営委員会)  
 関西支部活動報告  
 追悼…(6)  
 額田 敏氏亡くなる  
 昭和54年度事業報告…(6)  
 昭和55年度事業計画(案)…(7)  
 昭和54年度収支決算書…(8)(9)  
 昭和55年度予算書(案)…(10)  
 会務報告・ルーム日誌…(9)(10)  
 会員移動…(11)  
 お知らせ…(4)(10)  
 カット/吉阪隆正・松本真太郎・芳野満彦

▶日本山岳会事務取扱時間  
 月、火、木、土曜 10時~20時  
 水、金曜 13時~20時  
 日曜・祭日は休み  
 ▶図書室開室時間  
 日曜・祭日・月曜を除く毎日  
 13時~20時

### 新監事に 鳴原啓佑氏 西堀会長、チョモランマ登山の成功を報告

(社)日本山岳会の昭和五十五年  
 通常総会は、さる五月十六日(金)  
 午後六時から会員多数を集め私学  
 会館(東京都千代田区九段北四一  
 二―二五)の七階ホールで開催さ  
 れた。

この総会では、昭和五十四年度  
 事業報告および収支決算、財産目  
 録、昭和五十五年の事業計画案  
 および収支予算案また第三号議案  
 として監事の選任などの承認が行  
 われたほか、昨年、本年度にまた  
 があった本会の大きな事業のひとつ  
 であるチョモランマ登山の報告が  
 西堀会長から約三十分間にわたっ  
 て行われ、ひき続き恒例の懇親会  
 が同館の別室で行われ盛会であっ  
 た。その内容は以下の通り。

総会では中川常務理事の司会で、

定款第二十九条の規定によって西  
 堀会長が議長に選出され  
 た。ついで同常務理事に  
 よって、現在会員総数三  
 五三八名、内出席会員数  
 一七〇四名(委任一五八  
 一名)、従って定款三十  
 三条の1/3の会員数を満た  
 すものとして総会の成立  
 が宣言された。

西堀会長は本会の会員  
 数が漸増し、健全な発展  
 をしている事を喜ぶと  
 (新入会員一八一名、復  
 活一三名、物故、除籍者  
 九五名、計九十九名増)  
 とともにチョモランマ隊の  
 成功を祝って挨拶をし  
 た。



三田名誉会員の音頭で乾杯(総会後の懇親会で)

物故者(一九名)  
 松本善二 岩永信雄 渡辺公平  
 児島勘次 中村謙 直木重一郎  
 大野俊夫 山口清秀 松井久之  
 助 酒井吉国 関野重政 斎藤  
 兵三郎 藤井運平 伊丹捷衛

山井基福 片山欣弥 小林幹三  
 郎 長尾幸七 今岡義夫

ついで一号議案である昭和五十  
 四年度の事業報告は中島総務担当  
 常務理事、収支決算、財産目録に  
 ついては飯野財務担当常務理事か  
 らそれぞれ説明があり拍手をもつ  
 て承認された。

それによれば昨年度に行われた  
 本会の主な事業の内容は、集会、  
 研究会、講習会、展覧会、支部活  
 動などは三十数回に及び、とくに  
 前年度より活動を開始した科学研  
 究委員会の研究会やチョモランマ  
 関係の集会が目立った。その他恒  
 例の登山施設の改善その他山岳遭  
 難の予防活動、自然保護運動の推  
 進、学生部や青年懇談会メンバー  
 によるシックルムーン、ブラマー  
 峰などの海外登山の企画や実施、

山をぎれぎれ  
 切り抜ける登山

海外との交流、また「山岳」「山」  
 「山日記」などの発行等の多彩か  
 つ活発な事業が行われた。

これに対して昨年度の予算決算  
 については、会費収入の増加や新  
 選復刻版などの予想を上まわる収  
 入増と支出面での節約合理化が  
 行われた結果、収入総額三四、九  
 七、二二一円、支出総額三〇、六  
 四三、二六六円となり、五十五年  
 度への繰越が一四、四〇八、一九五  
 円に達するという極めて健全な経  
 理内容となった。またルームの返  
 済金については昨年度は約六四〇  
 万円ほど減少し、毎年六〇〇万円  
 ずつ返済が行われるため、今後約  
 五年間で完済となりそれ以後は完  
 全に本会の自前のものとなる。(片  
 岡監事よりすべてが正確かつ妥当  
 であるとの監査報告あり。)

第二号議案である本年度の事業  
 計画(案)およびそれに伴う収支  
 予算(案)についてそれぞれ一号  
 議案と同様、中島、飯野両担当常  
 務理事からの説明があつて、これ  
 も満場拍手の中に承認された。

昭和五十五年の事業計画につ  
 いては、とくに本年度はチョモラ  
 ンマ関係の展示会などがあるが、  
 その他はほぼ前年度と同様程度の  
 集会、研究会その他が計画されて  
 おり、それらに対する予算は収入

三、一八万円、支出三、四二二・六万円となり、それぞれ前年の七兆、七・六兆アップとなっている。なおこの執行に当っては諸物価高とうの折でもあるが、安易な会費の値上げは行わずに収入の増(とくに会費収入)、事業費支出の一層の合理化などを行うことにしている。そのため本年度予算は均衡を保つため繰越金のやや減少となつて若干無理した形となっている。

第三号議案の役員の改選については本年度は監事交替のみであったが、これについては三月三日の評議員会の合議にもとづいて片岡監事の退任、代つて嶋原啓佑氏(四一八二番)が新監事に選ばれた。なお、小原勝郎氏は留任となつた。

最後に、本年度六十三名の除籍者の承認、並びに議事録署名人の選出が行われたが、署名人については中島総務担当常務理事の提案により斎藤麻(五九二番)、堀田弥一(一二三番)の両氏にそれぞれ決定された。(本記事関係資料は六頁以下に掲載)

ついで七時より七時半まで、西堀会長による詳細なチョモランマ登山隊の成功への経過、並びに今後の行動などの報告が行われ極め

て有意義であった。(要約別掲) なお、その後ひきつづき恒例になつてゐる懇親会が同館の七〇二号室で行われた。まず、三田幸夫元会長の乾杯の首頭にはじまり、同氏の葉巻の差入れなどもあり、いつもながら一転して会場騒然としてなごやかな雰囲気となつた。閉会は八時三十分。

(写真・文 小倉 厚)

・チョモランマ登山の成功への経過(要約)

一昨々年、前田義徳氏を団長とする日中友好スポーツ団体の視察団が派遣された時(日本体育友好代表団一九七七・十・二十七〜十一・八)その一員として中国を訪問し、その時の事柄が実を結び、昨年六月にチョモランマ登山の許可がおりた。この計画の推進はあらかじめ理事会で決められた渡辺副会長がその任に当り、現地交渉ではチョモランマ登山に関する約定書が作成された。九月半ばに出発した斎藤淳生氏を隊長とする偵察隊は、雪崩により中国隊から三人の犠牲者、日本側も長谷川隊員が肋骨を折るという事件が起きた。そのためノース・コルまで登るといふ予定の行動はとれなかつた。

村井葵著「高峰への挑戦(高所における自己管理技術)」

を讀んで

中島道郎

こんど村井葵さんが、この高所医学入門書ともいふべき本を出版した。雑誌「岳人」三〇二号(四七年八月号)から三一八号(四八年十二月号)までの十七回にわたつて連載されたものに更に手を加えて一冊にまとめたもので、表紙の帯に書かれてゐるように、「高所医学のことはドクターに任せておけばよい」という他力本願的な考えは、苛酷さに耐えなければならぬ高所登山には通用しない」という考え方から、高所低圧環境下において、自分の体を自分で守るためには最低これだけは知つておいて欲しいという願いをこめて書かれたものである。その目的は高所での意図まことに壮とすべく、そのために払われた著者の努力たるや、おそらく大したものには違いないと心から敬意を表する次第である。この「自分の体は自分で守れ」というスローガンは立派なもので、その線に沿つていくつか良い事が書かれてある。曰く、「高所疲労を防ぐには、先ず筋肉を鍛えておけ(77頁)」、「低酸素症は自覚できない(96頁)」、「高所登山に際しては自覚症の有無にかかわらずなく、一定期間の高所滞在ののちは一応低所で休養し、再び高所へ登っていく(211頁)」、「高所

では禁煙すべきだ(45頁)」などなど。しかし本書全体を通じて申せば、著者の高い理想とは裏腹に、医学的観点からして、思い違ひの点が非常に多く、内容ももうすでに古くなつてしまつたものが少なくない。本書の影響力はかなり強いものと考えられるので、もし本書を、村井さんの書いたものだから、として無条件に信用する読者が増えてくるならば、わが国登山界にとつて由々しき事態ともなり兼ねないのでここに筆を執る次第である。

著者は高山病のことはドクター任せでよい筈はないと書いてゐるが、実は日本には高山病のことで任せるに足るようなドクターはほとんどいないのである。高山病のことをよく知つてゐる医師すら少ない現状にあつて、医師でない村井さんにいろいろ思い違いがあつてもそれは当然といふべく、むしろ医師でないのによいくもここまで書いたと感心させられる。しかしいったん本になつてしまつと、書いた人が何者であれ、書かれた内容が問われるので、「素人」を相手に批評するといわれては返す言葉もないが、問題が高所登山という、酷しい事態に関することなのでやむを得ない。間違いを一つ一つ

つ取上げていたのではキリがないので、ここでは「高山病」の根本的な認識に関わる基礎的事項についての誤りのいくつかを正しておきたい。

第一は高山病と減圧室内急性低酸素症との混同が見られることである。これは現象としてはひどく違ふもので、多分著者にも内心その区別がついてゐるものと思われが、あまりにも見事な航空実験隊でのデータと説明に感心しあの記事になつたものであろう。航空実験隊の実験モデルは本来飛行士のためのものであり、種々工夫凝らされてはゐるものの、まだ登山者のためのものになつてゐるとは言えない。この種のデータは今後とも更に集積され、解析され続けなければならぬが、そのデータを早飲み込みし、そこから論を進めるような考え方は、今の所実際から遊離したものと言わねばなるまい。

第二、高所順応とは、血中の赤血球が増加することによつて完結するといふ考え方(10頁)が本書の始めから終りまで貫かれてゐるが、これはもう古い。しかし著者と同様、世の指導的立場にある登山家の多く、或は医師すらも、今なおかく信じてゐると思われ、これは一言なければなるまい。高所滞在中に血中の赤血球が増加してくる現象は、呼吸が早くなつたり脈が速くなつたりする、

今年もまた上高地山研で逢ひましょう！

本隊の入山については北東稜というオーソドックスなものだけでなく、北壁もやるという二本立てであったため、中国側は入山料を両方についてももらいたいという要求を出してきた。また一方では、両方を一度にやるのは無茶ではないかという気もした。しかしマナスルをやられた先輩やエベレストをネパール側からやられた先輩の方々の経験聞きながら、少数精鋭でいけば大丈夫ではないかと思つた。最初は三十名という枠が登山隊だけかと思つていたが、中には報道陣も含むということ、それに報道陣の要求が多勢のため、最初きめた枠を四十名に増やすということを交渉により実現させた。報道陣の意欲的な要求もテレビ八名、新聞五名とおさえることにした。そして北壁隊と北東稜隊は十二名ずつで隊を組むことにし、各支部には隊員の推薦を依頼した。しかし、推薦された者は皆千両役者で、子役だの黒子といった脇役をしてくれる者が少なかった。芝居が千両役者ばかりでは成立たぬように、脇役となる隊員も必要であるから、チョモランマ委員会の方々の同意を得て、その線での人選もおこなった。

資金面においてはJACの通常会計の枠外とすることにしていたが、幸い読売と日本テレビが丸がcaeでやってくれることになった。ただし隊員には、今までの通例として参加費を要求し、その分はプールしておいて、すべて済んだ時に精算することとした。日本と中国という社会構造の違うものが協力してやる登山は、かなりむずかしかったが、偵察隊によってその辺の瀬踏みがなされ、判断が可能となった。中国側に犠牲者がでて心配したが、中国側はこの犠牲者の死を無駄にしないで頑張ろうと提案された。このことも今回の成功には、大事な要素だつたと思う。

自由主義圏の登山では金によって協力者を動かすこともできないが、中国では贈賄行為になりかねない。金はすべて北京の銀行にデポジットされ、かつてのチョモランマ登頂者王富州氏が会計を握り、その都度必要経費をそこから出していった。

北壁隊、北東稜隊は夫々別個に事業部制のようなかたちをとり、お互に頼るとか甘えるといった融通のきかせぬものとし、宮下副隊長、浜野副隊長は夫々の責任で隊を指揮し、その二隊を渡辺隊長がコントロールした。

元来、登山隊と報道陣の間におこりがちなあつちもく、夫々がJACの会員であり、会員として報道を分担するというかたちがとられていた。そういったチームワークは日本山岳会の伝統でもあり、渡辺、浜野、宮下といった人々の統卒のよさも上げられる。このこ

のと同じく、一種の高所反応というべく、つまり、順応する迄の過程であつて結果ではないのである。のみならず、赤血球が増える」と血液は粘つくくなるが、粘った血液を循環させるためには心臓は余計に働かねばならず、血圧も高くなるので、生体にとっては必ずしも有利な現象とは言えないのである。また赤血球の多い少ないを云々するのであるから、高所では脱水状態になっていて血液が濃縮されているので、相対的に赤血球数が増加しているように見える面があることを忘れてはならない。

第三、高所で命を失う原因は、(一)肺水腫、(二)高所衰弱、(三)血栓症の三つしかない(216頁)という捉え方は大雑把すぎる。肺水腫については最近かなり説明されて来た面も少なくないが、要するにこれらについてはまだ何も分っていないといわねばならない。そのところのつっこみがなされていないのでは、事態解決の何の役にも立たない。

第四、心不全(124頁)、慢性高山病(127頁)、肺気腫(128頁)などの疾患がかなり詳しく(ややピント外れに)記述されているが、実際には、高所登山家は先ず健康人でなければならず、その健康人が高山に登って初めてこういう疾患に罹るといふことはあり得ない



ので、これらの記事は全く無意味といえよう。こういう無意味な記事が割合多い。

もう一つ脳浮腫がとりあげられているが(131頁)、水頭症と混同されており、その記述はもはや救い難い。ここの所の理解が高山病にとつて最も大切なことであるのに、「高所ではこういうことも発生しうるといふことを知っておきたい(132頁)」で片付けられているに至っては、もはやまた何をか言わんやである。つまり脳を巡る血液中に酸素が不足すると、脳神経細胞の中に水分が貯溜する傾向を示し(それが脳浮腫なのだ)、嵩じて来ると脳は正常に働かなくなるのであつて、そこから「高山病」と総称されるあの不愉快な症候群が出て来るのであり、また、別に大して難しい所でも何でもない地点で、ベテラン登山家が突如滑落死する現象も実は皆それであつて、この脳浮腫あるいは脳神経低酸素症を論ぜずして高所医学を論ずることが出来ないくらい大切なポイントである。しかし今のところ、この面における説明は非常に

におくれているのである。

第五、眼底出血に対する認識が極めて不十分である。文中随所にその現象についての記載が見られるのに、その重大性についての言及が見られないのは惜しまれる。これは一九七六年パミール隊に随行した名古屋の浅野博士による報告以来、今では常識になったと言えらると思うが、それに對する説明がなされていないのは残念だ。

以上医学知識に関する問題点をほんの少しばかり挙げてみた。

本書の後の方に高度障害による遭難の実例が、一八九五年のナンガ・バルバット(何故この山がネパールなのか不思議)隊以下一九七九年のアンナプルナ南壁隊までの計一二九隊について縷々述べてあるのは参考になる。私に言わせてもらえらるなら、本書はむしろそういう面をより詳しく、より「科学的」に記述することを主にすべきではなかったらうか。死亡例の解析ばかりではなく、生還例も同じように大切であるから、あの場合は死亡し、この場合は生還出来たという事実を具体的に積上げていくことによつて、高山死という。かくも不気味で不可解な現象が少しずつでも分つて来、またそれによつて防止策も浮び上つてくるものと期待出来るように思われる。次にはそういう観点に立つた本をものにして頂きたいものである。(AACK・医博)

とが中国側にも影響し、中国側五十六名のチームワークもよく、これも今回の成果につながった。

また今回の登山には科学技術の徹底的な活用がはかられた。われわれが駆使できる場所の最新の登山技術だけでなく、通信連絡についても一人一人がトランシーバーを所有し、通信連絡を円滑化した。ベースキャンプからは電波を通じてテレックスがどんどん日本に入ってくるし、こちらからの資料もどんどんベースキャンプに送られた。ベースキャンプからは登山中の隊員夫々に直接通信が届いた。さらに気象観測についても、ヤルン・カン・カンの時のハム通信による状況把握の確性から、今回もこの方法をとって、京大の中島氏にはホテルの一室を利用してもらい、現地から入手した資料を整理してもらった。これは現地で気象に関する研究を忠実にやっていた渡辺隊長や横山隊員の協力、独自の目的でノース・コルから風せんを上げ、高層気象の観測データを収集していた中国側の資料提供にも言及しなければならない。このような豊富な資料はまた気象衛星ヒマワリから送られてくる三時間ごとの、ほんの僅かな部分の情報ではあったが、正確性を期するための突合せによりさらに有効になった。

自分たちが日本山岳会員であるという誇りとともに、北壁隊、北

東稜隊と隊を分けたことにより、お互いの意志と意欲が影響し合う結果となった。両隊の活動はトランシーバーや望遠鏡により、非常に細かい点まで把握でき、お互いの励みともなった。

宇部隊員が小規模な雪崩により転倒し二〇〇〇呎の氷上をほとんど真直に墜落した。幸い遺体はすぐ発見できたが、これは悲しいできごとだった。このことにより宇部隊員の遺族がとられた態度「明の遺志を継ぎ、明の代りに頂上に行ってもらいたい」といわれたけなげさは、頂上を目指す隊員の強力な支えともなった。

さらに隊員たちに刺激を与えたものにイタリヤのメスナーに、北山単独登山の許可証が出たということがある。日本隊が帰ったすぐあとに、日本隊の登った同じルートに登るといふ報道は、チームをさらにまとめ、サポート隊に誰かを頂上に立てようという気持をもたせた。頂上直下でビバークをしたが、正確な気象データによる安全性の確認の上でおこなわれたものである。

現場の様子が逐一報道されてくるといふ情報過多の状態は、心配の種ともいえるが、今回の登山は健全であったといえよう。

頂上に立てばよいという報道の姿勢には不満があった。登山は無事下山して終るといふことが仲々わかってもらえなかった。

こうして、とにかく日本山岳会の名を汚すことなくアルルートも成功したことは、宇部隊員の犠牲というところもありますが、よかったですと思う。

日本山岳会としての報告会なり発表会は、全員が戻ってきてから「モランマ委員会を開き、そこで委員方の意見にもとづいて決めたいと思う。」(文責・岡沢)

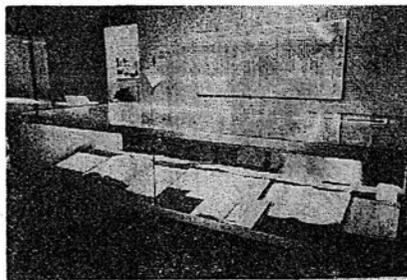
小さいこと、大切なこと

「山岳」立派な投稿に支えられて戦後一段と光彩をまわしてきていることは会員として有難いことといつも満足している。また公の月刊機関誌というべき「山」にしても軽いエッセイ、報告はじめ最近では「モランマ通信」、会務報告が月々手許に届けられ楽しいよみものと喜んでいられるのである。これ等が多くての会員に期待をよせられているといふことは皆さんが立派な活動、研究、労作を発表して下さるからである。そして特異な記事以外は二番煎じのようなものがないのがまず普通である。と私は思っていた。ところが最近二番煎じのものをあたかも自分が書いたようにタイトルと発表者名を変えて会報に投稿している人がいるのを知って驚いた。同じ会員内部のこととはいえ山仲間のことでは無い。外部に關係ないことではあるが、一応注意しておく方がよいと



藤木九三の資料室新設

故藤木九三の出身地である京都府福知山の市立文化資料館内に「藤木九三資料室」が、今度新たに開設されることになり、



藤木九三資料室内部

考えその人に無断流用——<sup>はきま</sup> 欠と糊でつなぎ合せ数ヶ所は原文の意味さえ通じない荒っぽいやり方——を残念に思うことを伝えた。すると「私は以前本部の理事をやったことがあり心配無用」と見当がよいな返事を出してきている。しかも二ヶ月後に至って「あれは自分

去る四月十三日に披露の展示会が催された。福知山は藤木九三翁が中学時代まですごした地であって、著作品と遺品資料が蒐集されたが、遺品と資料は藤木二三男、諏訪多栄蔵氏らにより提供されたもの。藤木翁の名著「岩登り術」の元原稿、RCC会員名簿等貴重な品々が展示された、この資料室は常設されており、地元出身の先覚者を顕彰する意味あいのもとに企画されたものである。

(坂戸勝巳)

藤江幾太郎

ネパール油絵展

時、七月一日〜七日

(十一時より十九時)

日曜及最終日は十七時

◎所、銀座アートホール 中央区銀座8-110、コリドー街

電話〇三(五七一)五一七〇

お知らせ

七月十六日の三水会は七月十五日(火)に変更します。

の知らない間に他の役員(支部)が投稿したもの、詳細を調べて報告する」と再び奇怪なことをいってきている。投稿者の他にまた一人おかしな支部役員があることになり全く哑然としてしまった。毛色の変わった会員が出来るのもよいが、これではJACも変りすぎ

だ。私は続稿の中断を申入れたが  
きかれなかった。

編集者があらゆる登山関係記録  
に目を通すという事は不可能で  
あろう。こうした異質なものが入  
ってきても判らないかも知れない  
が、しかし既発表のもので無断使  
用と判れば掲載中止するだけの権  
限を持ってほしいと思う。投  
稿者が元理事だからといって遠慮  
する必要はない。役員会も掲載中  
止の権限を編集者に与えておいて  
頂きたい。でないと今後何を讀ま  
されるか判らないということにな  
る。

伝統ある会報に将来こうした投  
稿の現れないことを願うため敢て  
一個人の不快と迷惑をここに記し  
た次第。私は今後その投稿者のも  
のが会報に出ることがあってもよ  
い。

### △ケダルナート通信▽

・4月20日真夜中、13時間半かか  
って無事ニューデリーに到着。計  
画書を見せて、つたない英語で、  
何とか Landing certification を貰  
う。空港で高度計をあわせるつも  
りがうまく伝わらず、出直しにな  
る。Y.M.C.Aでひと眠りして朝食  
後、サリンさん、チャクラパテ  
イさん、バラティを訪問。サリ  
ンさんはお留守で、お帰りになっ  
たら電話をいただくことになる。  
チャクラパティさんはすっかりお  
元氣になられ、I.M.F関係のお世

く注意しながら読まねばならぬ  
と考えている。流用者およびその  
人にもまた無断で投稿したという  
支部役員を含めて、三人の事情説  
明はその後いまだに届けられてい  
ないことも付記しておきたい。

一六一五生

(編集者へのお心遣い、感謝申し  
上げます。投稿されたものは、投稿  
される方の責任で処理されるのが  
通則ですし、仰せの通り充分には  
仲々目が届きません。

掲載中止も、ご連絡しましたよ  
うに、すでに校了となり本印刷に  
かかった発行日の数日前で如何と  
もし難く、御意に叶わず、この点  
も遺憾に存じています。○)

### 昭和55年度会費を納入下さい

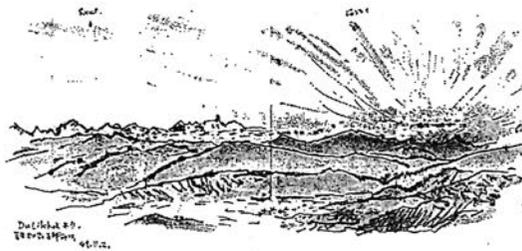
### 婦人懇談会

話をして下さるとのこと。カメッ  
ト・メンバーのバラティは、磯野  
剛太さんから計画をきいていた由  
で、デリーでの準備を手伝ってく  
れることになった。

・4月21日(月)今日から仕事開  
始。I.M.Fで通関の書類を貰い、  
指示に従って Cox & Kings のサ  
ンジアルサラン氏と打合せ。  
2、3日かかる感じ。

正午頃、カメット・メンバー  
で、われわれのリエゾン・オフィ  
サーであるラマちゃん到着。ラマ

は、リエゾンとしての仕事はもち  
ろん、メンバーとしての意見をし  
っかり持っている。ケダルナート  
・ドーム経由はリッジが長く、非  
常にシャープなので、固定ロープ  
が相当必要になるとのこと。I.T  
B.P.隊のつたアイスフォールか  
らのルートも検討の要がありそう  
だ。



カトマンズの東 Dulikhel より/吉阪

デリーは、インドの人も「Very  
hot」という暑さで、一度にた  
くさんの仕事ができない。でもイ  
ンド・ベースであせらずやってい  
けば、結局終るようです。  
(富田由紀子)

皆様お元氣にお過ごしのことと  
存じます。大勢の方にお見送りい  
ただき、本当にありがとうございます。

### 報告

#### 上高地山研、開所式

#### 山研運営委員会

上高地山研は五月三日(土)に  
開所しました。今年は雪も少なく  
柳の芽ぶきも早そうです。管理人  
の津村夫妻は四月末から山研入り  
して開所の準備、奥原信濃支部長  
にもお世話になりました。

開所式には折井副会長、奥原信  
濃支部長、永年会員の野口末延ご  
夫妻ら会員、非会員二十数名が参  
加、夜の懇親会にもぎやかでし  
た。

今年の山研はロビーに珍しい額  
を飾りました。会員塩湯庄太郎氏  
寄贈の筑摩電気鉄道(松本電鉄の  
前身)開設当時、大正十二年七月  
発行の上高地、槍、穂高の案内絵  
図です。大型のフレームに入っ  
てなかなか見映えがします。山研に  
おいでの際は是非ご覧下さい。  
(関塚)

メンバーひとりひとりに手紙を  
いただき、私も改めて隊長の任務  
の重さを感じています。良い結果  
が得られるようがんばるつもりで  
す。

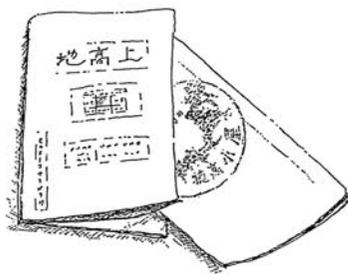
山研のオープニングは無事に終  
ったことと思います。留守をして  
申しわけありません。折井さんは  
じめ委員の皆さんによるしくお伝  
え下さい。  
(高本信子 弘付山口宛)

### 関西支部活動報告

(54年度下期)

・9月22日~24日 月例山行

「徳島 矢野山(一八四八m)」  
川崎重工坂出工場山岳部のお世  
話で往復の船旅を楽しみながらの  
山行である。東祖谷山村の落合峠  
までは林道がはいっているので車



で楽をする。頂上迄は珍らしい草花が咲く静かな後縁である。

・9月30日 読書会 (参加者29名) 於 今西組

ルームが無く支部長の会社の一室に保管されている蔵書の虫干しと、未だペーパーナイフのはいらない「山岳」にナイフを入れないがの読書会。なお目録は支部報N O・31に掲載しております。

・10月6日~7日 観月会 (参加者13名) 於 田淵山荘

支部会員の田淵邦彦氏のびわ湖西岸の山荘をお借りしての会である。残念ながら雨であったが、天気に負けずよく飲みよく駄弁る。

・10月16日 集会 (参加者9名) 於 スポーツマンクラブ

追悼 額田敏氏亡くなる

会員九七六、額田敏さんがなくなられた。先生とは、昭和十五年二月、スキー行を共にした。パーティの立上秀二、西岡一雄、穴倉春の三名はすでに黄泉の客となった。同行で残ったのは海野治良君と私だけである。十五日発晴温泉、十六日寺小屋峰、十七日鉢山、十八日夕方夜間瀬へ下山。下山コースが不明なので、前日飯山の先生た

今シーゾンのビッグクライムの一つ、ラトックI峰に登頂された京都カラムクラブの高田直樹氏をお招きしてお話を伺う。

・11月2日~4日 月例山行 (参加者32名) 於 上高地山研

今回、支部の山行として初めて山研を使わせて頂き、ここをBHとして秋の西穂高岳、焼岳、徳本峠等への登山を行う。夜には津田周二名譽会員に昔の上高地の有様など興味深いお話を伺う。

・11月28日 集会 (参加者36名) 於 スポーツマンクラブ

京都カラムクラブのもう一つの遠征であるカラム五大氷河の踏査とシアカンリ、バルトロカソリの登頂を二上純一氏と高橋ドクターをお招きしてお話を伺

ちを案内した二人の番頭さんに案内してもらった。立上さんたちは腹制動をして、チッタカタと叫んだ。後日立上さんが「雪艇弥栄」にチッタカ・スキーを発表した。この出発の朝、誰かが「船のさまして動かさる、鹿島槍てふ、あいの山かな(三好達治)」と口ずさんだのをおぼえている。

(田中栄蔵記)

う。 (参加者18名)

・12月9日 忘年会 (参加者18名) 於 北摂 たつみや

恒例の猪鍋をつつきながら委員、会員を交え、この一年を語り合う。

・12月23日 餅つき会 (参加者25名) 於 今西支部長宅

今年初めの催しで特に子供達に餅つきを見せようと企画したが大人の会員の方がはしゃぐよう会場は、さながら幼稚園の様子。

・1月23日 新年会 (参加者36名) 於 梅田 大東洋

今年、住友クラブ改築のため、大東洋にて催される。いつもながら遙かぶりの方が来られ新年の挨拶を交す。

・1月26日~27日 月例山行 (参加者49名) 於 近江 金養岳(一三二四m)

地元会員の山下政一氏のご案内で中津尾より登山。今年、雪も多くシールが有効である。ラッセルに頑張るが〇〇〇m付近にて時間切れとなり往路の大滑降?を楽しみつつ下る。

・2月24日 月例山行 (参加者16名) 於 播州 千ヶ峰(二〇〇六m)

地元会員の守田治夫氏のご案内で姫路の北にあるこの山を登る。下界は、少し春めいていても植林を抜けて稜線に出ると残雪も多く遠く「氷の山」など但馬の山々はまだ白く輝いている。

・3月20日~23日 月例山行 (参加者27名)

「奥美濃 大日ヶ岳(一七〇八m)」 毘沙門岳(一三八五m)

庄川村にある山荘をBHにしてすっかり春山らしくなった二つの山を登る。大日ヶ岳は、大日スキー場より頂上を経て南の村界尾根を、毘沙門岳は、白山スキー場より頂上を往復。共に山頂にて御神酒を献じて、その勢いで滑り下る。

(参加者9名) (鼎 治紀)

日本山岳会 昭和54年度 事業報告 (五五・四・一) (五五・三・三)

一、登山の指導と奨励に必要な集会、講習会及び展覧会の開催

(1) 集会 5月11日 支部長会議 (本会)

23日 第39回小集会 長谷川恒男氏グランドジョラス北壁単行報告会 (本会)

6月3日 ウェストン祭 (信濃支部担当、上高地)

5日 信濃支部小集会 (本会)

山菜勉強会 講師 片岡 博、高波隆男 (本会)

9・10日 第381回現地小集会 (平標山)

11日 第382回小集会 (本会)

山菜山行写真交換会 (本会) 28日 穂高の映画と懇親会 (本会) 9月12日 第383回小集会 北海道日高の山と谷を語る会 講師 林 和夫 (本会) 29・30日 自然保護全国上高

10月26・27日 第384回小集会 (上高地) 地集会

峠を越える山旅 (赤岩峠) 27日 第12回山岳図書交換会 (本会)

31日 植村直己氏中国帰国報告会 (私学会館)

11月14日 第385回小集会 (私学会館) ヒマラヤの蝶を語る会 (本会)

12月1日 年次晩餐会 (本会) 講師 堀 勝彦 (本会)

6日 自然保護集会 (京王プラザホテル) 「35年目の樺太」 講師 佐々 保雄 (本会)

9日 ヤングアルピニストの集い (労音会館)

1月13・15日 第386回小集会 (八方尾根) スキー懇親会 (私学会館)

2月13日 第11回山岳図書を語る夕べ「鳥水の方法」 講師 近藤信行 (本会)

15日 チョモランマ登山隊社行会 (私学会館)

2月22日 新入会員オリエンテーション (本会)

26日 第8回山岳史懇談会 (本会) 「大正期のわが山登り」 講師 麻生武治 (本会)

(2) 研究会 6月12日 科学研究委員会第二回講演会「山の山と学問と」 講師 今西錦司 (私学会館)

29日 科学研究委員会第三回講演会「高山植物とその特徴と背景」講師 小野幹雄 (本会)

8月11・12日 科学研究委員会 鳥海山高山植物探査行 (鳥海山)

12月6日 雪崩研究会 (鳥海山)

12月6日 雪崩研究会 講師 金坂一郎

12月7・3月 婦人懇談会主催 「女性のための登山セミナー」 講師 金坂一郎、松永敏郎、清



### 財産目録

昭和 55 年 3 月 31 日現在

#### (資産の部)

##### 1. 基本財産

種類	預入先	金額
貸付信託	三井信託銀行本店	2,380,000円
"	日本信託銀行本店	420,000
"	中央信託銀行本店	5,200,000
合計		8,000,000

##### 2. 現金および預貯金

種類	預入先	金額
現金		25,012円
振替貯金	東京振替貯金課	588,485
普通預金	協和銀行市ヶ谷支店	2,022,737
"	三菱 " "	590,876
"	三和 " 本郷支店	106,162
"	東京 " 本店	19,998
"	三井信託銀行新宿西口支店	81,864
"	日本信託 " 本店	29,221
"	中央信託 " 本店	595,858
定期預金	協和銀行市ヶ谷支店	11,000,000
普通預金	協和銀行市ヶ谷支店(図書出版研究基金分)	1,174,241
定期預金	" ( " )	7,000,000
"	" ( " )	1,045,000
"	" ( " )	5,380,000
合計		29,659,452

##### 3. 建物および土地

A 事務所および図書室		金額
場所	東京都千代田区四番町5番4	72,720,170円
構造	鉄筋コンクリート造、陸屋根、地下1階付5階建 (事務所) 区分所有建物1階部分 103.32㎡ 宅地持分 1,124.56㎡×339/10,000 (図書室) 区分所有建物1階部分 55.22㎡ 宅地持分 1,124.56㎡×339/10,000	
B 上高地山岳研究所		
場所	長野県南安曇郡安曇村上高地国有林114イ林小班	
構造	鉄筋コンクリート造(一部木造)1棟 100.69㎡	9,583,808
合計		82,303,978

##### 4. 図書

種類	摘要	冊数
和書	54年度受入冊数 190冊	4,221冊
洋書	" " 144冊	1,622冊

##### 5. 什器備品

品名	取得年月日	取得価格	所在
大テーブル(2台セット), テーク材750×1200×720	48.7.31	164,200円	上高地山岳研究所
ソファセット, テーク材レザー張	48.7.31	178,000	"
冷蔵庫, 日立 R 303 T	48.7.30	148,500	"
テレビ, サンヨー 20-C501	48.7.30	108,000	"
スク립トマティック宛名印刷機, M36	53.2.10	265,500	事務所
リコースーパードライ, SD-105	53.2.27	158,000	"
書庫内移動書架一式, コンパクル	53.2.10	1,500,000	図書室
応接セット一式, 布張イス, テーブル XLE-30	53.8.2	218,000	事務所
閲覧用テーブル(2台), 木製	53.9.28	250,000	図書室
ライティングビューロー, 木製	54.6.23	280,300	"
合計		3,270,000	

##### 6. 絵画

題名	種類・号数	作者名	掲額, 保管場所
白馬岳	油A-50	中村清太郎	日本民俗資料館
富士山麓	油A-25	茨木猪之吉	"
田代池の白樺	油変型6	中村清太郎	事務所(談話室)
群猿	墨絵	石井鶴三	図書室
伊豆半島	油-10	茨木猪之吉	事務所(集會室)
針の木峠	油-10	茨木猪之吉	図書室
徳本峠から穂高連峰	墨絵	石田吟松	"
初冬の両神山	油-10	茨木猪之吉	"
鳥(カット原画)	墨絵	石井鶴三	"
メールドグラス	エッチング		"
モンブラン	エッチング		"
後立山連峰	水彩	中村清太郎	"
カンチェンジュンガ	エッチング	シュラギット ワイト	"
ユングフラウ (1966年作)	油	山里寿男	事務所(集會室)
酒沢より北穂高	水彩-6	山里寿男	図書室
槍ヶ岳初夏	油-10	中村清太郎	"
カンチェンジュンガ	バステル	矢崎千代二	事務所(談話室)
北穂高滝谷	油-25	足立源一郎	"
或朝の槍ヶ岳	油-25	足立源一郎	図書室
北穂高岳主峰	油-25	足立源一郎	事務所(談話室)
槍ヶ岳	油-P8	足立源一郎	上高地山岳研究所
タンボチエの僧院	水彩-4	清野恒	事務所(集會室)
シュルパニの親子	水彩-4	清野恒	"

##### 7. 刊行物・服飾品棚卸現在高

摘要	金額
刊行物(山岳, 山岳複製版等)	1,621,610円
服飾品・記念品(ネクタイ・灰皿等)	1,038,430
合計	2,300,040

#### (負債の部)

- 長期借入金(未済残高) 33,609,380円  
ア 借入先 中央信託銀行株式会社本店  
イ 利率 年利 8.16%  
ウ 担保 事務所および図書室の建物と土地を担保として差入れる。  
エ 返済年月 昭和 63 年 1 月まで
- 退職給与引当金 2,000,000円  
社団法人日本山岳会昭和 54 年度収支決算書および財産目録を監査し, 正確妥当なことを認めます。  
昭和 55 年 4 月 21 日

社団法人 日本山岳会  
監事 片岡 博  
監事 小原 勝郎

および情報交換  
・日・ネ協会の事業に対する協力  
(登山)  
・中国登山界との交流の促進  
・その他  
・その他を達成するために必要な事業を行う

☆

出席者 西堀会長、折井副会長、  
中島、飯野、中川、鈴木、山口  
小倉、岡沢、越田、嵯峨野、菅  
沢各理事、片岡監事、大塚、村

5月理事会  
(5月6日午後6時30分  
本会ルーム)

会務報告

昭和 54 年度収支決算書

自昭和 54 年 4 月 1 日  
至昭和 55 年 3 月 31 日

一般会計 収入の部

(単位 円)

科 目	予算額	決算額	増減(△)
基本財産運用収入	480,000	512,710	32,710
基本財産利息収入	480,000	512,710	32,710
入会金収入	2,250,000	2,910,000	660,000
入会金収入	2,250,000	2,910,000	660,000
会費収入	20,000,000	23,048,514	3,048,514
会費収入	20,000,000	22,201,611	2,201,611
次年度会費収入		696,903	696,903
終身会費収入		150,000	150,000
事業収入	5,380,000	5,939,959	559,959
広告料収入	1,100,000	1,246,450	146,450
山日記印税収入	380,000	380,000	0
その他	1,000,000	1,496,348	496,348
刊行物売上収入	500,000	569,610	69,610
その他事業収入	600,000	930,960	330,960
山研使用料収入	1,800,000	1,316,591	△ 483,409
補助金収入	300,000		△ 300,000
補助金収入	300,000		△ 300,000
寄付金収入		13,000	13,000
寄付金収入		13,000	13,000
雑収入	700,000	908,280	208,280
受取利息	400,000	560,320	160,320
雑収入	300,000	347,960	47,960
別途会計運用収入		1,499,558	1,499,558
図書出版研究基金収入		1,454,558	1,454,558
会員遺贈基金収入		45,000	45,000
別途会計取崩収入		140,300	140,300
図書出版研究基金取崩収入		140,300	140,300
小 計	29,110,000	34,972,321	5,862,321
前期繰越収支差額	10,079,110	10,079,110	0
前期繰越収支差額	10,079,110	10,079,110	0
合 計	39,189,110	45,051,431	5,862,321

一般会計 支出の部

(単位 円)

科 目	予算額	決算額	増減(△)
運営管理費	9,424,000	9,066,914	△ 357,086
給料・手当	4,200,000	3,932,600	△ 267,400
文具費	120,000	115,600	△ 4,400
印刷費	500,000	543,400	43,400
旅費交通費	500,000	276,290	△ 223,710
通信運搬費	700,000	704,000	4,000

火災保険料	60,000	65,100	5,100
営繕費	100,000	28,000	△ 72,000
諸税会費	700,000	602,005	△ 97,995
光熱水料費	100,000	109,053	9,053
電話料	200,000	242,380	42,380
会議費	100,000	109,020	9,020
交際費	200,000	298,550	98,550
什器備品費	100,000	95,000	△ 5,000
振替手数料	140,000	157,480	17,480
支部運営費	420,000	586,600	166,600
福利厚生費	100,000	69,936	△ 30,064
事務所管理費	600,000	517,800	△ 82,200
その他	384,000	384,000	0
雑費	200,000	230,100	30,100
事業費	16,180,000	14,041,756	△ 2,138,244
出版費	6,640,000	6,648,670	8,670
図書費	550,000	668,262	118,262
調査研究費	510,000	205,350	△ 304,650
指導費	670,000	691,445	21,445
支部関係費	800,000	536,250	△ 263,750
海外諸関係費	1,000,000	18,150	△ 981,850
山研運営費	2,060,000	1,512,369	△ 547,631
その他事業費	600,000	747,000	147,000
印刷費	600,000	464,087	△ 135,913
通信運搬費	2,500,000	2,283,660	△ 216,340
光熱水料費	250,000	266,513	16,513
借入金返済支出	5,822,000	5,821,008	△ 992
借入金返済支出	5,822,000	5,821,008	△ 992
別途会計繰入支出		1,649,558	1,649,558
別途会計繰入支出		1,649,558	1,649,558
予備費	2,000,000	64,000	△ 1,936,000
予備費	2,000,000	64,000	△ 1,936,000
小 計	33,426,000	30,643,236	△ 2,782,764
次期繰越収支差額	5,763,110	14,408,195	8,645,085
次期繰越収支差額	5,763,110	14,408,195	8,645,085
合 計	39,189,110	45,051,431	5,862,321

別途会計

昭和 55 年 3 月 31 日現在

(単位 円)

内 訳	前期繰越	繰入収入	取崩支出	次期繰越
終身会費積立金	3,230,000	150,000	0	3,380,000
ルーム基金積立金	652,016	0	0	652,016
図書出版研究基金	6,859,983	1,454,558	140,300	8,174,241
会員遺贈基金	1,000,000	45,000	0	1,045,000
退職給与積立金	2,000,000	0	0	2,000,000
合 計	13,741,999	1,649,558	140,300	15,251,257

5 日(土)

ルーム日誌

(55年4月)

学生部委員会

◎報告事項

▽山研は5月3日に開所した。(折井)

▽オデル氏招請の件(西堀)

7月上旬の来日を目的に受け入れ準備をする。了承

▽オデル氏招請の件(西堀)

以上承認

◎報告事項

①学習院ヒマラヤ登山隊

一九八一年プレにギャチュン・カン(七九二二)の登頂をめざす。

②長崎北稜会カラコルム登山隊

一九八一年にサンゲマル・マール(七〇五〇)またはパツラグループPK25(六八八五)の登頂をめざす

▽海外登山に対する本会推薦状交付の件(中島)

北東稜より加藤隊員が5月4日に登頂した。不幸にして遭難した北壁隊の宇部隊員の遺体は発見、収容された。宇部隊員のご遺族宅へは5月7日に折井副会長が弔問する。

木、金坂、小原(電)、山崎各評議員

委任 宮下、中村、高本、川上各理事、小原(電) 監事

▽チョモランマ登山について(西堀)

北東稜より加藤隊員が5月4日に登頂した。不幸にして遭難した北壁隊の宇部隊員の遺体は発見、収容された。宇部隊員のご遺族宅へは5月7日に折井副会長が弔問する。

木、金坂、小原(電)、山崎各評議員

委任 宮下、中村、高本、川上各理事、小原(電) 監事

昭和 55 年度 予算書 (案)

55.4.1~56.3.31  
(単位 円)

1) 収入の部

勘定科目		予算額	前年度額	増減(△)
大科目	中科目			
基本財産運用収入		600,000	480,000	120,000
	基本財産利息収入	600,000	480,000	120,000
入会金収入		2,250,000	2,250,000	
	入会金収入	2,250,000	2,250,000	
会費収入		22,500,000	20,000,000	2,500,000
	会費収入	22,500,000	20,000,000	2,500,000
	過年度会費収入			
	次年度会費収入			
	終身会費収入			
事業収入		4,930,000	5,380,000	△ 450,000
	広告料収入	1,250,000	1,100,000	150,000
	山日記印税収入	380,000	380,000	
	その他印税収入	500,000	1,000,000	△ 500,000
	刊行物売上収入	500,000	500,000	
	その他事業収入	600,000	600,000	
	山研使用料収入	1,700,000	1,800,000	△ 100,000
補助金収入			300,000	△ 300,000
	補助金収入		300,000	△ 300,000
寄付金収入				
	寄付金収入			
雑収入		900,000	700,000	200,000
	受取利息	600,000	400,000	200,000
	雑収入	300,000	300,000	
小計		31,180,000	29,110,000	2,070,000
前期繰越収支差額		14,408,195	10,079,110	4,329,085
	前期繰越収支差額	14,408,195	10,079,110	4,329,085
合計		45,588,195	39,189,110	6,399,085

新緑の上高地へ

今年から上高地に入ります「ロジ立山連峰」と同じ経営です よろしくお願ひします

上高地明神

山荘よしきや

支配人 坂本 幹

電話上高地 026395-2216

(日本山岳会会員・元愛知県山岳連盟理事長)

2) 支出の部

(単位 円)

勘定科目		予算額	前年度額	増減(△)
大科目	中科目			
運営管理費		10,144,000	9,424,000	720,000
	給料手当	4,400,000	4,200,000	200,000
	文具費	120,000	120,000	
	印刷費	600,000	500,000	100,000
	旅交通費	500,000	500,000	
	通信運搬費	900,000	700,000	200,000
	火災保険料	70,000	60,000	10,000
	営繕費	100,000	100,000	
	諸税会費	550,000	700,000	△ 150,000
	光熱水料	150,000	100,000	50,000
	電話料	250,000	200,000	50,000
	会議費	100,000	100,000	
	交際費	200,000	200,000	
	什器備品費	100,000	100,000	
	振替手数料	170,000	140,000	30,000
	支部運営費	600,000	420,000	180,000
	福利厚生費	100,000	100,000	
	事務所管理費	600,000	600,000	
	その他管理費	384,000	384,000	
	雑費	250,000	200,000	50,000
事業費		16,760,000	16,180,000	580,000
	出版費	7,140,000	6,640,000	500,000
	図書費	550,000	550,000	
	調査研究費	810,000	510,000	300,000
	指導費	860,000	670,000	190,000
	支部関係費	900,000	800,000	100,000
	海外諸関係費	100,000	1,000,000	△ 900,000
	山研運営費	2,000,000	2,060,000	△ 60,000
	その他事業費	600,000	600,000	
	印刷費	600,000	600,000	
	通信運搬費	2,800,000	2,500,000	300,000
	光熱水料	400,000	250,000	150,000
借入金返済支出		5,822,000	5,822,000	
	借入金返済支出	5,822,000	5,822,000	
予備費		1,500,000	2,000,000	△ 500,000
	予備費	1,500,000	2,000,000	△ 500,000
小計		34,226,000	33,426,000	800,000
次期繰越収支差額		11,362,195	5,763,110	5,599,085
	次期繰越収支差額	11,362,195	5,763,110	5,599,085
合計		45,588,195	39,189,110	6,399,085

は・7月16日21時から、NTVで2  
お知らせ  
4月5日 植松清一(55・3)  
4月2日 金成覚治(55・3・9)  
8月3日 堀江節子  
8月9日 森正二  
7月3日 小椋秀好  
6月7日 竹勝生  
6月4日 坂本亨  
5月8日 佐分利栄  
5月1日 川島正行  
4月1日 田辺修  
4月2日 川島正行  
3月5日 川島正行  
3月1日 川島正行  
2月9日 川島正行  
2月1日 川島正行  
1月8日 川島正行  
1月1日 川島正行  
8月2日 退会者  
8月9日 上善峰男(関西へ)  
3月9日 トヨタ自動車工業山岳  
3月1日 トヨタ自動車工業山岳  
6月8日 横田明男(関西↓岐阜)  
6月4日 支部変更  
4月6日 松村 潤  
4月4日 終身会員  
24日(木) 今月の来室者 386名  
23日(水) 図書委員会  
22日(火) 三水会  
21日(月) 理事会  
14日(月) 会計監査  
12日(土) 婦人懇談会  
10日(木) 学生会総会  
10日(木) 学生部指導委員会  
9日(水) 学生会  
8日(火) 山研委員会 常務理  
8日(火) 策委員会 遭難対  
婦人懇談会

に尋問したり放映され、写真展は7月29日、東京銀座の松坂屋を皮切りに順次開かれる予定です。あとがき 会報の編集を担当するようになつて一年たった。かつて学生であった頃、文学部の研究室に仁戸田六三郎という大先生を訪ね、人間存在の根拠についてお伺いを立てたことがあった。先生のお答えは、「この学校に入った頃はそんなでもなかったのに、二、三年して学校の悪口を余所様に言われると、腹が立つようになるだろう。そんなものだ」であった。正直な話、これまで碌な読み方もしていなかった会報を、隅から隅まで読まされる破目になつて一年。会報に対する愛情が芽生えなうと言えは嘘になる。

読めば読むほど新しい発見をして喜びに満たされ、あるいは次から次へと会報に名を残し去っていく人々の数に悄然とする。

はたして貴方はこの世の影を裏在とお思いか、など生意気な考えを持つたりもして…… (O)

昭和五十五年六月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十四

サンビニウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(03) 四四三三

振替口座東京三十四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂